

交流

〔例発表要旨〕

◆董子華 南朝文学における「都」に関する考察 漢・魏の首都である長安と洛陽は過去の繁華の象徴として、詩文中によく描かれている。永嘉の乱で晋室が南渡した後、長江下流の建康（今の南京市）は漢民族政権の新たな都になった。中原恢復の意欲の低下や南方の開発に伴って、南朝の人々のあいだには長安と洛陽の繁栄を懐かしみつつも、建康が新たな都であるという意識が次第に確立されてきた。ところが、南朝時期の「都」に関する文学作品、特に詩において、描かれた「都」は建康だけではなく、長安と洛陽もよく詠じられる。本発表は南朝文学における「都」に着目し、都城賦と詩における「都」のイメージを分析し、「都」は文学トポスとして、どのような有様を呈するのかを考察した。

まず、漢代から南朝時期までの都城賦の制作状況について考察した。全体的に見ると、南朝時期において、都城賦の数量が少なくなり、また「三都賦」のような都を描く長篇の賦が見られなくなつた。次に、鮑照の樂府詩における「京洛」「皇州」などの語について考察した。樂府が叙事性を有するため、詩に描かれた「都」は建康の喩えではなく、ただ虚構性を持つている物語の中の一つの要素であると考えられる。虚構性がある「都」に関する詩は梁と陳にも盛んに作られた。この時期、「長安道」「洛陽道」を題にする詩が集団的に制作されている。それらの作品を並べて見れば、作品のモチーフと景物・人物の表現手法はかなり類似することがわかる。また、詩題が違っているが、この二種類の詩のテーマはいずれにも昔の大都市の繁華を謳うことであり、詩における「長安」と「洛陽」のそれぞれの特性はほとんど見えない。「長安道」「洛陽道」における「都」は定型化している空間になっていると考えられる。最後に、謝靈運と謝朓の詩を例とし、都としての建康はどのように描写されているのか分析した。王朝の都として

描かれた建康は、実在の場所より、むしろ概念的な空間と言え、南朝期の詩人たちの多岐な思考様式と自らの心象風景に繋がっていると考えられる。

◆田禾・郭雲輝 趋向补语「V1V2+来/去」中「来/去」的隐现 本発表は、複合的方向補語における三番目の動詞である『来/去』の使用・不使用を取り上げるものであり、中国語教育の一助となるべく、先行する一番目と二番目の動詞の意味特徴、構文的特徴、動作の已然・未然、目的語の有無及びそのポジション、話者の視点・情報の適量などの観点からアプローチし、『来/去』の使用・不使用の法則を一般化し、『来/去』の使用・不使用による文の意味への影響を究明することが目的である。

◆西野由希子 香港の映像作家・羅玉梅の「殖物」——文学と映像の協奏 香港の映像作家・羅玉梅 (Law Yuk-mui) の「殖物 (Pasiche) (二〇一九年) は三画面による映像作品で、二〇二〇年、水戸芸術館で開催された「道草展」に出品された。一九五三年にオランダ人

マイケル・ロゲが撮影した香港植物公園の映像、昆劇の役者が舞台化粧により男性から女性に姿を変える様子、役者が昆劇「牡丹亭」を演じる場面の三部で構成されている。「牡丹亭」の部分では、昆劇のせりふ、董啓章の小説「安卓珍妮（アンドロジニー）」と余光中の詩「紫荊賦」からの引用が字幕で提示される。本作品は「三」にさまざまな意味がこめられており、テキスト（文学）・演技（昆劇）・音響（音楽）や、地理・歴史・記憶、二つのもの間にあるもの、どちらでもないもの、両方を持つもの、を表していると考ええる。香港では近年「植物」に「自由」や「多様性」等が重ねられているが、本作品のタイトル「殖物」からは「土地が語るもの」を表現してきた羅の香港という土地のアイデンティティへの思いが見て取れる。

（博士論文要旨）

◆横田むつみ 唐代女性詩人の詩と文
学―上官昭容（婉兒）、李冶、薛濤、及び魚玄機の詩作から― 本論文では唐代の女性詩人が詩作を習得して詩を詠む

ことよって唐代文学に遺した足跡を辿り、その文学的意義について論述している。第一部「宮女の詩作」では上官昭容、第二部「妓女、女道士の詩作」では李冶、薛濤、魚玄機、と初唐から晩唐までの女性詩人について時系列に沿って論じたうえで、第三部「新たな恋情の詩」では、李冶、薛濤、魚玄機の詩に用いられている「相思」の語と恋情の詩について論究している。妓女や女道士は何を契機に詩作を習得したのか、詩には女性固有の表現や主張がみられるのか、また彼女達の詩が士大夫の詩作に与えた影響等についての考察から論証している。

彼女達は宴席や道観等での士大夫との出会いを契機に、士大夫の詩に習い倣って詩の受容者となり、やがて自らも創作者となつていった。そして、彼女達が詠いだめた「相思」を用いた恋情の詩は、それまで詠うことのなかった士大夫にも詠われるようになる。唐代にはもはや単に男性に付随するだけの存在ではない妓女や女道士が現れて、中国古典詩が空前の発展を遂げた唐代文学の一翼を担つて

いたと考えられる。
（修士論文要旨）

◆大西由美子 「舜子變」について―舜説話の比較から見るその特徴と伝承 敦煌文献の「舜子變」は、舜が受難に遭つても孝行を貫き、終には堯から帝位を譲られるという「孝行譚」の語り物である。これには『史記』等とは異なる内容を含み、神仙思想や儒仏の思想が混在する独特の特徴を有している。各文献の舜説話を比較すると『史記』等の経史系統は舜の「孝」や「徳」を重視しているが、「舜子變」など孝子譚系統の説話は、帝釈天による救済や因果応報など仏教の影響を受けている。「父母恩重經」や「雜寶藏經」には孝の思想が見られ、また舜の孝子譚が描かれている寧夏固原北魏墓漆棺画や、敦煌莫高窟の北魏や西魏造営の窟に、中国の伝統思想と仏教が混在して描かれていたことから、思想の融合は北魏の頃盛んに行われ、この時期に舜説話も孝を介して仏教に取り込まれて、「舜子變」の原型ができたのではないかと考えられる。十一世紀以降姿を消した「舜子

變」だが、閩南の説唱の「大舜耕田歌」「大舜坐天歌」には、その内容や表現に「舜子變」の片鱗が残されていることが明らかになった。

◆柴田末美江 莫言『蛙』における「罪」と「贖罪」について くおぼさんの犯した罪と贖罪を中心として

『蛙』は、タブーとされてきた計画出版をテーマにノーベル賞作家莫言が中国人作家として初めて描いた作品である。本論文では計画出版政策の渦中で苦悶するおぼさんの姿を通して人間の罪と贖罪に焦点を当て、作品解読や先行研究を踏まえて考察を重ねた。なぜ、おぼさんは神聖な胎児の生命を葬る罪を犯したのか、『蛙』本文中の「特務！叛徒！烂货！」にヒントが隠されている。この時代、これらのレッテルを貼られたら生存の道は途絶える。同僚から罵られたこの言葉におぼさんは恐れ戦き、己の生存への欲望のために体制側の執行人として大罪を犯した。そして、蛙に襲われ贖罪意識に覚醒し、贖罪の道程で「生きて責め苦に遭い続け罪を償っていくしかない。」と吐

露し、生涯贖罪の道を歩み続けることとなる。これらの考察の結果、おぼさんの罪の根源は生存への欲望であり、贖罪は一生背負い続けるものとの結論に至った。『蛙』は人間に己の罪と贖罪に向き合う機会を与えてくれる作品であると考える。

◆潘一嵐 沙汀一九三一年〜一九四五年の小説創作について「諷刺と四川を中心に 沙汀（一九〇四〜一九九二）は中国現代文学史において「四川作家」「諷刺作家」として名高い。「四川」はその川籍作家としての身分を表しただけでなく、主な創作テーマに対する概括でもある。一方、「諷刺」は彼の最も芸術的特色のある創作を表している。

本論文は「諷刺」と「四川」をキーワードにして、先行研究の中でまだ十分論説されていない点を中心にして、沙汀の一九三一年から一九四五年の小説創作を分析する研究である。本論文は四つの章で構成されている。第一章では沙汀の一九三一年から一九三七年の創作探索の道を整理し、沙汀がどのように「四川作

家」「諷刺作家」になったかを検討し、その抗戦期の諷刺の特色が形成された根源を解明する。第二章では沙汀の抗戦期の創作の立場、態度及び文学創作上の具体的な表現を検討し、抗戦期間に創作された特殊な風格の内包を再度確認する。第三章では、「諷刺」に関する研究を補完するために、沙汀の作品における「喜劇性」の生成の問題を検討する。第四章では、沙汀に書かれた四川の風俗図を分析し、独特な「諷刺」の完成との関係について論じる。

◆李夢雨 魔術的リアリズムから異なる道へ―閩連科の「神実主義」 閩連科の作品は荒唐無稽な筆致で底辺の民衆の生活を描き出した。本研究では、閩連科の作品に現れる神実主義に注目し、神実主義と魔術的リアリズムの複雑な関係を明らかにしたいと考える。

本論文では、現在主流となつているルイス・レアルの定義に基づいて、閩連科の「神実主義」と「魔術的リアリズム」を比較する。そして、閩連科の作品とガルシア・マルケスの作品と比べ、主に

「醜を美とする」、「体についての叙事と病気の隠喩」など同じところと、「循環的な叙事」、「時空、空間が交錯する手法」など相違点がある。総じていえば、現在の神実主義の理論では、すでに魔術的リズムと具体的に分析できるほどの違いがあるが、テキストの表現手法では、関連科はまだ自分の道を見出せず、魔術的リズムをベースに、自分の創作需要に応じて書き直すだけであるということである。

〈近況報告等〉

◆橋本陽介 『中国語における「流水文」の研究』の出版 中国語の書き言葉を読んではいたり、翻訳をしたりして、「なぜここが読点でつながっていつてしまうのか?」と思ったことはないだろうか。句点で区切っても読点で続いてもよい場合が少なくない。なぜそのようなことが起こるのだろうか。

その根本的な要因は、比較的独立した節が次々に付加される形で展開し、「一つの文」が形成されていることが非常に多くあるからである。本書は中国語書き

言葉（特に小説言語）に多く登場する長くて複雑な「一つの文」を言語学的・修辭学的に明らかにし、ひいては言語における「一つの文」について中国語書き言葉の観点から考察をしようとするものがある。「一つの文」はしばしば「一つの思考を表す」とされる。中国語書き言葉において、句点から句点までで伝達される内容がもし日本語や英語などと異なるとするならば、何をもって「一つの思考」「一つのまとまり」とするかが異なるということになる。ではそれはいったい何なのか。もし違ふとすればどのような違いだろうか。中国語の「文」の単位を不思議に思ったことがある方は、ぜひ一読いただきたい。